剪淞吟社史稿　その六

入谷仙介

一

明治四四年九月一日、宍道の湖上に小舟を浮かべて、清遊を楽しむ三人の男があった。[1] 横山耐雪、村上琴屋、西川潜斎である。詩を賦し杯をあげ、興たけなわになったころ、耐雪が言いだした。「湖水の風光はこんなにすばらしい。（永坂）石埭先生にご来遊を願って、一首お作りいただき、石碑に彫って嫁島に建て、この名勝にさらに花を添えてはどうだろう」他の二人も手を打って「それは妙案だ」といい、善は急げと舟を島につけ、建碑の場所を検討した。

碧雲湖泛舟抵嫁島[2]（碧雲湖に舟を泛べ嫁島に抵る）　村上琴屋

彷聴松風入指弾　彷（さながら）に聴く　松風　指弾に入るを
琵琶声裡玉珊珊　琵琶の声裡　玉珊珊
棹従神女洲辺去　棹は神女洲辺より去り
神女凌波羅襪寒　神女　波を凌ぎて　羅襪寒し

前半は松風の音を琵琶にたとえ、後半は魏の曹植の「洛神賦」を借りて、湖水に沈んだと伝えられるいにしえの美女が、曹植に歌われた洛水の女神のごとく、女神となって出現することを期待する。

舟を大橋に漕ぎもどしたころ、潜斎が急病で帰宅する。彼は翌年三月に没するから、あるいは死病の始まりであったのかもしれないが、その時はさしたる病いにも見えず、琴屋が詩を作って、家に愛妾の待つ彼の艶福をうらやんだ程度のことで、彼らは耐雪の提案のもたらした新しい興奮に胸をふくらませて、この日の清遊を終えた。これが現在も嫁島にそびえる、石埭「碧雲湖棹歌」詩碑建立の最初の胎動であり、建立の事業が剪淞吟社に、おそらく社員たちも当初予想していなかったであろう新展開をもたらしたのであった。

二

この年一一月末に耐雪は上京した。[3] 三八年三月の上京以来、まる

六年半ぶりである。この時のおもな用件は、石埭に面会して、先日の舟遊びの中で出た、松江来遊と作詩を請うことにあったと思われるが、詳細な記録は残っていない。

一一月二六日には土居香国の仙寿山房に招かれた。相客は岩渓裳川のほか四人である。二八日には田辺碧堂の一簪楼に招かれた。碧堂は二年前に柚木玉村とともに山陰に遊んで、耐雪が歓迎しており、その時の返礼であろう。相客は金枝小峴、大沢鉄石、土居香国及び画家の上田丹崖であった。この日、小雨降る夕暮の五時から会が始まり、美酒盛饌座に満ち、丹崖が席画を書き、主人の珍蔵の書画を玩賞して、興は深更に及んだ。一二月二日には岩渓裳川の夢艸書屋に招かれた。午後四時に耐雪が到着、酒肴が供せられ、夫人令嬢も座に出て興を助け、深夜一二時近くまで歓を尽くした。相客は土居香国である。三度とも香国が同座したのは、この時、香国が随鷗吟社の幹事であったから、耐雪を引きまわす立場にあったものである。いずれもまとまった詩は残っておらず、ほとんど聯句である。

辛亥中秋耐雪入都訪予青山草廬欵然道故（辛亥の中秋に耐雪都に入り予を青山の草廬に訪い欵然として故きを道う）

田辺碧堂

客自雲州至　客は雲州より至り
城中又素秋　城中　又　素秋
長天雁飛過　長天　雁飛びて過ぎ
明月笛声流　明月　笛声流る
今夕草堂酒　今夕　草堂の酒
去年山沢遊　去年　山沢の遊
吟詩相対坐　詩を吟じて相い対坐すれば
風露満南楼　風露　南楼に満つ

七言絶句に打ちこんで、絶句碧堂といわれたこの人の、珍しい五律である。第六句は前年の山陰の遊を指す。

夢艸書屋聯句[5]（魏塁聯句一九首選一首）

山陰大雅俟扶輪　香国　山陰の大雅　扶輪をまつ
愧我生来才不純　耐雪　愧ずらくは我の生来才純ならざるを
宿約聊開鶏黍局　裳川　宿約　聊か開く　鶏黍の局
尊前酔墊白綸巾　香国　尊前　酔いて墊く　白綸巾

三

四四年は新しい胎動をはらみつつも表面さしたることもなく推移し、四五年（この年七日三〇日改元大正となる）前半もほとんど無事にすぎたが、後半に入って、にわかに中央名家の来遊が相い次いで、剪淞吟社も久方ぶりに活況を呈した。

第一陣となったのは大江揚鶴（一八四七―一九二一）と田辺松坡（一八六二―一九四四）である。[6]揚鶴は本名の卓で、史上にその名を留める。土佐の人。若くして勤王活動に身を投じ、維新後は官界に入って神奈川県権令となり、未解放部落民や娼妓の身分解放に尽力、なかんずくペルー国籍船マリールーズ号に監禁されていた中国人労務者を救出した事件によって知られる。のちに反政府的傾向を強め、西南の乱に呼応して政府転覆を策し、事成らずして下獄、出獄後は後藤象二郎の大同団結に参画、また自由党の幹部となり、

第一回総選挙で衆議院議員に当選したが、第二回選挙で落選後は経済界に転じ、晩年は仏門に入って天也と号した。松江に来遊した時は、まだ出家していないが、一代の風雲児も往年の覇気消えて、好好爺の風貌を深めていたことであろう。平生漢詩を好み『明星山房詩抄』一巻がある。松坡は本名新之介、肥前唐津の人。東京開成中学校長等の職についた。哲学者田辺元の父。

二人の来遊を訪じ、歓待を依頼する松原瑜洲（一八五三―一九一六）の手紙を耐雪が目にしたのは七月一二日であった。期日は一三日で明日のことである。仁多郡に十数日出張して帰宅した当日であったから、耐雪は大いにあわてた。しかし、他ならぬ瑜洲の依頼でもあり、昨秋上京したおりに、瑜洲の邸宅碧雲荘で、揚鶴にも会っていた。瑜洲、名は新之助、松江藩士の子、ベルリン大学に留学して水産学を学び、大学助教授、農商務省技師、第一高等学校教授、水産講習所長となった。明治政府を支えた技術エリートの一人である。不昧流の茶道をよくし、漢詩を好んで随鴎吟社に名を列するなど、風流の道にも暗からず、在京島根人中の有力者であった。

時に剪淞吟社の初期社員の多くは没するか、あるいは他郷に赴任して、耐雪を中心とした松江付近の医師たちが、わずかに孤塁を守る状態にあったから、耐雪は翌一三日に松江に出て、まず皆美館に投宿していた揚鶴を訪ね、すぐ岡崎鶴渚の環翠園に案内した。鶴渚は運兵衛（一八五〇―一九一九）、松江の実業家、政治家、環翠園は殿町の今の島根県農林会館の地に在り、みずから設計指揮し、当時市内の名園といわれたという。岡崎は揚鶴と同じ第一回帝国議会議員で相識であった。ここには長居せず、当時は市外菅田村であった有沢山荘（菅田庵）を訪ねた。宗匠有沢宗滴門下の西尾松太郎の案内を受けて一椀の玉茗に枯腸を湿し、宿に帰って午後は舟遊びとなった。嫁島に舟をつけて、島名の詮議になった。かって森槐南は名が雅でないというので、新婦磯と改めたが、揚鶴は磯より洲の方がよいといい、耐雪たちも賛成、ここで三首の聯句を作った。

松江撫景遠遊躯　揚鶴(7)　　松江に景を撫す　遠遊の躯（み）
万頃烟波一棹孤　松坡　　万頃の烟波　一棹孤なり
我亦杳然乗興去　耐雪　　我　亦　杳然として　興に乗じて去り
長竿欲釣季鷹鱸　揚鶴　　長竿　釣らんと欲す　季鷹の鱸（すずき）

結句は西晋の張翰の故事、季鷹はその字、都の洛陽に出仕したが、秋風とともに、郷里江南の、まこも、じゅんさい、鱸魚の味の恋しさに耐えかねて辞職して帰郷した。松江が鱸魚の名産地であるのに利かせる。

舟は天神川に入り、伊勢宮を迂回して西に向かい、松崎水亭につけた。すでに田代活処、井上井蛙、中島秋圃の三人が先着して宴席を用意していた。すぐに酒が始まり、聯句をまわし、分韻して詩を作り、座は夜深けまでにぎわった。松子という妓が、南画家のもとに奉公していて、文墨の席の扱いになれているというのでやってきて、扇を出して揚鶴に揮毫を求め、揚鶴が南画家との色模様をあてこする詩を書き、松坡がそれに注をつけたので、松子がはずかしがって扇で顔を隠すという一幕もあった。

松崎水亭雅集席上分韻得真（8）（松崎水亭の雅集、席上分韻して真を得たり）　大江揚鶴

二百三十里　二百三十里

一路奔飆輪　　一路　飆輪を奔らす
朝起出西洛　　朝に起きて西洛を出で
暮到松江津　　暮に到る　松江の津
且疑坤軸縮　　且つ疑う　坤軸縮みしかと
呉越如比鄰　　呉越　比鄰の如し
碧雲湖上酒　　碧雲　湖上の酒
一夜鷗侶親　　一夜　鷗侶の親
此時雨初霽　　此の時　雨　初めて霽れ
景色須臾新　　景色(けいしょく)　須臾に新なり
颯颯涼風起　　颯颯として涼風起こり
天地無炎塵　　天地　炎塵無し
蓴香上筋滑　　蓴香しく　筋に上りて滑かに
鱸魚割細鱗　　鱸魚　細鱗を割く
筆走龍蛇躍　　筆走りて龍蛇躍り
詩成金玉振　　詩成りて金玉振う
落落気蓋世　　落落として気世を蓋い
高談驚傍人　　高談　傍人を驚かす
重会何日是　　重会　何の日か是なるや
花月墨江春　　花月　墨江の春

松崎水亭觴揚鶴松坡両詞宗分韻(9)（松崎水亭に揚鶴松坡両詞宗に觴す、分韻）　田代活処

蘋花香裡木蘭艭　　蘋花の香裡　木蘭の艭
返照尚残紅半江　　返照　尚お残す　紅半江
神女洲辺烟忽合　　神女の洲辺　烟忽ち合し
遠山如夢落吟窓　　遠山　夢の如く　吟窓に落つ

翌一四日は宍道、杵築に遊んだ。耐雪は二賓とともに松江に泊り、この日も一日を案内に費した。いかに農村の開業医とはいえ、家業を二日も休んで奔走しているのはよく勤めたものである。汽車を宍道で降り、亡友木幡黄雨の十千年荘(とちねん)を訪れた。今の木幡山荘で、黄雨以前から独楽窩と称して別荘としていたが、黄雨が改築し、全国の古社寺からゆいしょある財物を集め、その年数が合計一万年に達したので十千年荘と名づけた。ただし、当時の建物は昭和初年に豪雪で倒壊、現在の建物は昭和三六年の再建にかかるという。黄雨の生前にこの荘の題詠をを広く天下に求め、松坡がこれに応じて一四首をものしたが、浄書に及ばぬうちに黄雨が没した。剪淞吟社の詩会に用いたこともある。

遊木幡氏山荘独楽窩(10)（木幡氏の山荘独楽窩に遊ぶ）　田辺松坡

蠟屐蹈苔苔磴危　　蠟屐　苔を蹈めば　苔磴危く
山禽驚起一声移　　山禽　驚起して　一声移る
林間泉石宜銷夏　　林間の泉石　銷夏に宜しく
池上亭台最可詩　　池上の亭台　最も詩に可し
前主風流余韵在　　前主の風流　余韵在り
名家翰墨古香吹　　名家の翰墨　古香吹く
当年題咏我辜負　　当年の題咏　我辜負せり
対景且傾荷葉扈　　景に対し　且(しば)らく傾く　荷葉の扈
午後は大社に詣でた。途中、出雲平野の田園が続くばかりで、説くべき歴史も、見るべき名山もない。しかし揚鶴は築地松をめぐら

した出雲平野特有の散村風景に関心を寄せ、他国では見られぬと珍しがった。大社では揚鶴が詳らかに歴史を説き、また建築を語って世界の各地と日本との比較に及び、博識な所を見せた。夕刻に及んで杵築を発し、日登へ帰る耐雪は宍道で下車し、旅を続ける二人と別れた。

宍道駅叙別聯句[11]（宍道駅に別を叙ぶ聯句）

東道多君為主人揚鶴　東道　君が主人為るを多とす
同游両日見情真松坡　同游　両日　情の真なるを見る
碧雲湖上又分手耐雪　碧雲の湖上　又　手を分かち
明旦参商相憶身揚鶴　明旦　参商　相い憶う身ならん

四

二週間の後、七月二八日には勝島仙坡と大沢鉄石とが来遊した。[12]仙坡（一八五八―一九三一）、名は仙之助、備後三原の人。東京帝国大学医学部教授、獣医学博士、中央獣医会長。日本獣医学界の巨頭であった。『静園詩鈔』一四巻がある。鉄石（一八六四―一九二四）、名は真吉、弁護士であったので、詩界では鉄石法家と呼ばれた。『鉄石詩鈔』二巻がある。いずれも当時の中央詩壇を支えるアマチュア詩人の有力者である。昨秋、耐雪が上京したおりに、永坂石埭の祭詩龕で鉄石に会い、山陰の遊をすすめた。四月に鉄石は九州に遊び、山陰にまわる予定を立てたが、風浪のために舟が出ず、中止した。当時、出雲今市（現出雲市）以西の山陰線は工事が始まったばかりで、九州山陰間の連絡は汽船によっていた。

七月、鉄石は再び九州に遊び、公務で各地を巡回していた仙坡と別府でたまたま出会って、旅をともにすることになり、宇佐神宮、耶馬渓をめぐり、門司から汽船琉球丸に乗って、杵築（大社）港に上陸、大社に参詣したのち、松江の皆美館に投宿した。

七月二八日、耐雪は旅館に二人を訪問した。席上まず話題にしたのは森槐南の出雲来遊の追憶である。指折り数えると足掛け十年になるが、一代の大家の来遊であるとともに、剪淞吟社創立の初めを飾る盛事であった。耐雪にとって生涯忘れられぬ記憶である。しかもその人は伊藤博文のハルビン駅頭の奇禍に巻きこまれて、今は亡い。客の二人にとってもかって詩壇の頭領と仰いで、浅からぬえにしを結び、ことに鉄石は、槐南の杜詩講義の出版に関係したことさえある。二人は追悼の心で、槐南の遺作に次韻した詩をそれぞれ作った。

同仙坡博士坐琉球丸赴雲州用槐南先生赴雲州詩韻各賦寄懐

耐雪詞宗[13]（仙坡博士と同に琉球丸に坐して雲州に赴く、槐南先生の「雲州に赴く」詩の韻を用い、各おの賦して懐いを耐雪詞宗に寄す）　大沢鉄石

浩浩雄風帆影軽　浩浩たる雄風　帆影軽く
艙中把酒話詩程　艙中　酒を把りて詩程を話す
長空大月與潮湧　長空　大月　潮とともに湧き
一葉扁舟破浪行　一葉の扁舟　浪を破りて行く
鷺約鷗盟嗟短夢　鷺約　鷗盟　短夢を嗟し
雪泥鴻爪記浮生　雪泥　鴻爪　浮生を記す
清光千里碧湖上　清光　千里　碧湖の上

曽照主賓尤有情　曽て主賓を照して尤に情有り

結句は耐雪が槐南を迎えたことを指す。後は例によって舟遊びとなり、田代活処が別の舟で同行した。活処は苧町で開業しており、煙波宅と称して家は湖に臨み、自宅に舟があった。この日も自家の舟を漕ぎ出したのであろう。活処が風景をさし示しつつ、大山、三瓶、洗合山、新（真）山と一々事こまかに説明した。嫁島から天倫寺にまわるころ、日はようやく暮れ、月が雲ににわかに隠れて、たそがれの湖面に鐘の声がひびき、仙坡は「湖水の景はここに極まる」と嘆賞した。舟中で聯句を付けたのも例のごくとである。

碧雲湖舟中聯句[14]（碧雲湖舟中聯句三十首選一首）

蘆葉蕭蕭水一坳仙坡　蘆葉　蕭蕭　水一坳

漁荘灯火隔松梢耐雪　漁荘の灯火　松梢を隔つ

不知商女興亡恨鉄石　知らず　商女　興亡の恨

悟後司勲酒盞抛仙坡　悟後　司勲　酒盞を抛つ

後半は杜牧の「秦淮に泊す」及び「追懐」の詩を用いる。司勲は杜牧の官名、司勲員外郎となったのでこういう。

引返して松崎水亭まで来ると、井上井蛙が湖畔に待ち受けて出迎え、水亭の楼上で酒宴となった。

松崎水亭觴仙坡鉄石両詞宗次韻[15]（松崎水亭に仙坡鉄石両詞宗に觴す次韻）　横山耐雪

来自九州行李軽　来るは九州よりして　行李軽く

山陰百里入回程　山陰　百里　回程に入る

詩於碧玉壺中得　詩は碧玉壺中より得

夢在水晶宮裡行　夢は水晶宮裡に行く

古廟深山鈴語響　古廟　深山　鈴語響き

平湖半夜月輪生　平湖　半夜　月輪生ず

剪淞置酒醒還酔　淞を剪り　酒を置き　醒め還た酔う

其奈恕忽逢別情　其れ　恕忽　逢別の情を奈んせん

対仙閣酒間聯句[16]（対仙閣酒間聯句五首選一首）

江水連天月近人活処　江水　天に連なり　月人に近く

一楼夜色浄無塵井蛙　一楼の夜色　浄　塵無し

画難描処詩能写仙坡　画の描き難き処　詩は能く写し

下筆吟朋如有神鉄石　筆を下せば　吟朋　神有るが如し

鉄石は翌日、仙坡と別れて帰途に上り、仙坡は更に旅を続けるはずであったが、三〇日に、にわかに帰京した。理由は記されていないが、この日、かねて危篤を伝えられていた明治天皇が崩じ、皇太子嘉仁親王が継承、年号が大正と改まった。このためであろう。

新天皇は皇太子の時、明治四〇年五月に山陰に行啓している。明治天皇は即位以来、国民を直接に掌握する近代天皇制樹立のため、精力的に全国巡幸を行ったが、山陰にはまだ及ばなかった。明治後期、天皇権力が地方に浸透するにつれ、山陰の人人はこのことを遺憾として、巡幸要請の運動を行ったが、日露戦後、天皇の健康が衰え、長期の巡幸に耐えられなくなり、皇太子が代理として来たものである。剪淞吟社員は、地方の有力者が多かったから、この行啓には、かなり関与しているもののようである。本幡黄雨は自宅に皇太子を迎え、接待に精魂を傾けたのが、早逝の遠因になったと伝えられ、西川潜斎は医師として救護班に入った。耐雪がどのように関与したか明らかでないが、「皇太子巡山陰恭賦（皇太子山陰を巡る、

恭しみて賦す）」七絶四首を残す。

五

勝島仙坡は一たん帰京ののち、八月に入って公務旅行を再開、鳥取県下を経て、八月二一日に大原郡に入り、大東の水長楼に二日間滞在した。[17] この度も仙坡は松江を通過、臨水亭に滞在しているが、耐雪は松江へは行かず、大東の宿を訪ねた。仙坡はこれまでの旅で作った詩をさっそく見せた。しかし、この日は畜産家が入れ代り立ち代り訪ねてきて、おちおち話しもできなかったので、翌日の再訪を約して、早早に辞去した。

二二日はあいにくのにわか雨が盆をくつがえすように降りしきり山をゆるがす雷鳴の中を家を出て、水長楼に達したころに、幸い雨は止んだ。仙坡は耐雪を座に迎えて、その場で一首詠んだ。

八月二十二日大東水長楼耐雪来訪有詩見眎次韻[18]（八月二十二日、大東の水長楼に耐雪来訪して詩有り、眎されて次韻す）

勝島仙坡

山翠吹烟鬱岌嵬　山翠　烟を吹きて　鬱として岌嵬
数声霹靂片雲開　数声の霹靂　片雲を開く
清新堪愛詩天地　清新　愛するに堪う　詩天地
一掃湿蒸今雨来　湿蒸を一掃して　今　雨来たる

夕刻、畜産家速水氏に招かれて、酒泉楼へ飲みにいった。ここは四二年に田辺碧堂と柚木玉村が来た時に飲んだ所である。仙坡は諧謔の詩を作って座興に供した。潮時を見てここは引きあげ、水長楼にもどって、速水氏の持たせた鮎と、木暮氏から到来の冷麦とで、また飲み直した。仙坡は欧米旅行の話をし、ジュネーブの風景の美を説いて、外国を知らない耐雪を感心させた。席に呼んだ菊寿という妓は、歌も三絃もやらず、黙りこくったままであった。仙坡が詩を立て続けに作って芸を催促したが、もじもじするばかり、耐雪が彼女の代りにいいわけの詩を作ってやった。

翌朝、飯石郡に向かう仙坡と日登に帰る耐雪とは、木次の里熊橋で別れた。ここでも仙坡の詩があった。この日一日で飯石、仁多両郡をまわり、二五日、木次に帰って臨水閣に投宿した。簸伊川の岸にあり、新築のこざっぱりした宿であった。耐雪はこの日も宿に仙坡を訪ねた。仙坡の詩道楽は知れわたっているので、旅行中、詩箋を出して書いてもらおうとする者が引きもきらず、さすがにうんざりしていた。この日は鳥取島根二県の予定を消化し、明日兵庫県に向かうというので、慰労会のようになった。耐雪は酒量はあまり多くなかったが、座談に巧みで酒席を盛りあげるのに妙を得ていたといわれる。この日も詩と談話がはずんだ。

木堤聯句[19]（木堤聯句八首選一首）

新涼如水入郊墟仙坡　新涼　水の如く　郊墟に入り
灯火風檐宜読書耐雪　灯火　風檐　読書に宜し
好趁辛勤退之迹仙坡　好し　辛勤　退之の迹を趁い
斐江水上結新居耐雪　斐江の水上　新居を結ばん

耐雪が仙坡と初めて会ったのは、三八年上京して、星岡の探驪文社の詩会に出席した時で、昨年上京した時は、仙坡は欧米視察旅行のために会えなかったから、七年ぶりである。明日仙坡が去れば、

再会は計り知りがたい。時に旧暦七月一五日に当り、明月は空に輝いている。杯のほどよくまわった所で、河畔の堤上に出、月を賞でながら散歩したが、明日の別れを思うと、いつか言葉はしめやかになった。

木堤臨水閣送仙坡博士還東京[29]（木堤の臨水閣に仙坡博士の東京に還るを送る）　横山耐雪

涼露一簾秋色匂　涼露　一簾　秋色匂い
中元節底餞離人　中元の節底　離人を餞す
飽看雲国嵐光翠　飽くまで看る　雲国の嵐光の翠なるを
去賞丹陵酒味醇　去りて賞す　丹陵の酒味の醇なるを
灯火禅房孤磬歇　灯火の禅房　孤磬歇み
草花池館乱蛩新　草花の池館　乱蛩新なり
他時相遇定何処　他時　相い遇うは定めて何処ならん
日下題襟簸水濱　日下　襟に題す　簸水の濱

注

(1) 横山耐雪「詩碑の由来」。掲載紙未詳。
(2) 剪淞集巻二。
(3) 随鷗集第八六編。
(4) 剪淞詩文第一六編。
(5) 随鷗集第八六編。剪淞詩文第一六編。随鷗集には題は無く、剪淞詩文によった。詩句の異同は無い。
(6) 随鷗集第九五編。耐雪送稿。
(7) 同上。剪淞集巻二にも収め「抵嫁嶋舟中（嫁嶋に抵る舟中）」と注し、我亦を同是に作る。
(8) 同上。剪淞集巻二にも収める。字句の異同は無い。
(9) 剪淞集巻二。
(10) 随鷗集第九五編。
(11) 同上。剪淞集巻二にも収める。随鷗集には題は無く、剪淞集によった。字句の異同は無い。
(12) 随鷗集第九四編。耐雪送稿。仙坡らの来遊は揚鶴らより後であったが、随鷗集への掲載は先になっている。
(13) 同上。剪淞詩文第一六編。剪淞集巻二にも収める。字句の異同は無い。槐南の原詩は「発卯三月将赴出雲玉池置酒見餞即賦此志別」
(14) 同上。剪淞集巻二にも収める。字句の異同は無い。
(15) 随鷗集第九五編。剪淞集巻二にも収める。題は剪淞集に従った。原題は「松崎水亭觴勝島仙坡大沢鉄石両詞宗次見貽詩韻」他に字句の異同は無い。
(16) 随鷗集第九四編。対仙閣は松崎水亭の雅称。
(17) 随鷗集第九七編。耐雪送稿。記事では仙坡の宿を長春楼とするが、次の詩の題により、水長楼とする。
(18) 剪淞詩文第一六編、剪淞集巻二にも収める。剪淞集には蒸を雲に作る。
(19) 随鷗集第九七編。
(20) 剪淞集巻二。